

筆山

第58号／2015年7月

土佐中・高等学校同窓会 関東支部会報

編集人/ 中平 公美子 (59回)

発行人/ 関東支部幹事長 市川 直介 (53回)

関東支部ホームページ : <http://www.tosako-kanto.org/>



集う5の回、意気強し

今年の同窓会は、卒業回末尾5の三五〇八五回生の有志が幹事を務め開催されました。

総会では、山本校長先生から例年の学事報告に代え、DVDの映写により今年の卒業式の答辞の紹介があり、多くの方が感銘を受けた様でした。続いて講師の森岡浩さん(五五回)により「名字とルーツ」と題して記念講演があり、長年の研究に基づく名字にまつわる多岐にわたる話を興味深く拝聴致しました。

会場を移行行われた懇親会。今年はご来賓を含め三六〇余名が出席、また、五十名を超える今年卒業の九〇回生の参加がありました。

山根風仁さん(九〇回)のチェロの演奏の後、いよいよ開会。ご来賓の紹介、尾崎正直高知県知事(六一回)の講演に続き、森郁夫支部長(四一回)の乾杯の発声により宴がスタートしました。

懇親会は参加者皆さんが歓談する中、九〇回生の紹介、土佐高OBOG学生よさこいチーム「陽」へのカンパのお願い、土佐校クイズ大会、抽選会、特別ゲストの酒井満先生指導の下での土佐校体操と続き、そして来年幹事の6の回への引き継ぎ式も無事に終わり、いよいよラストの校歌斉唱を迎え、全員が肩を組み高らかに校歌を歌い、エールを切り大盛会の内に閉会となりました。限られた時間ではありましたが、出席された同窓生皆さんには十分お楽しみ頂けたものと思います。

今年の懇親会は予想を超える参加者となり、嬉しかった反面、多少の混乱も生じるのではと危惧していましたが、「終わり良ければ全てよし」、5の回有志が協力一致、創意工夫を凝らし、準備万端、企画、運営、進行に取り組んだ結果、大過なく幹事の役割を果たせたものと安堵しております。

関東支部同窓会 2015. 6. 6



幹事代表・中井興一さん（45回） 高知の味ごっくん



<関東支部同窓会 概要>

開催場所：霞が関ビル35階

東海大学校友会館

開催日：2015年6月6日（土）

式次第

関東支部総会

1. 開会挨拶
2. 支部活動報告
3. 会計報告
4. 監査報告
5. 校長挨拶・学事報告
6. はちきん会のご案内
7. 学生・若手社会人交流会のご案内
8. 筆山会の紹介、ご案内

記念講演「名字とルーツ」

講師：森岡浩氏（55回）

懇親会

- 1位 山本
- 2位 山崎
- 3位 小松
- 4位 浜田
- 5位 高橋
- 6位 井上
- 7位 西村
- 8位 岡林
- 9位 川村
- 10位 山中

記念講演の森岡浩氏と高知の名字ベスト10



懇親会の始まりは
山根風仁くん（九十回）
のチェロ演奏から



↑ 酒井満先生と土佐校体操
→デハラショップもオープン



アイスクリンゆず君・パニラちゃん


 締めは肩を組んで校歌斉唱
 先導のエールは尾道から参加の
 山本紳さん(五五回)
お世話になった
恩師を囲んで

関東支部同窓会記念講演に寄せて

島村政典(五五回)

今年の関東支部同窓会の記念講演は、五五回生の同級生森岡浩君による「名字とルーツ」でした。

森岡君は、名字と高校野球というともに土佐中・高で興味をもった二つのテーマを合わせて約百冊の著作を出版しています。名字については、中学一年に代数を習った故吉本要先生が、新入生の名字を聞いて出身の村を言い当てる場面を見て、どうして名字から出身地が分かるのだろうと疑問をもったことがきっかけだったそうです。

演題が、年代や職業・立場にかかわらず、誰もがもっている名字という身近なテーマであったこともあり、土佐高の先生方や同窓会本部・支部からの来賓の皆様も含め二百名に近い同窓生が耳を傾けました。また、同級生の田口祥子さんが手作りの森岡君の著書の表紙をあしらった円形の飾りを演題の背景に配し、講演に色を添えました。

隣国の中国の名字の数は数千種類、韓国は約三百種類であるのに

対して、日本には十万を上回る種類の名字が存在していて、名字が生まれた時期は平安時代の武士が生まれた頃だそうです。それまでは、天皇より与えられ、変更することができない源、平、藤原、橘などの姓はありましたが、高貴な身分に限られ、広がりませんでした。平安・鎌倉時代と武士や公家を使い始めた名字が、室町・江戸時代と時を経るに従い庶民にも広がり、地名、地形・風景、方位・方角、職業、藤原姓の分化などによって、次々に生まれてきた名字のルーツを紹介しながら、明治政府による戸籍制度までの足跡をたどりました。講演の締め括りは、高知に多い名字のランキングで、納得のトップ十は多い順に、山本、山崎、小松、浜田、高橋、井上、西村、岡林、川村、山中でした。質疑応答も活発で盛況のうちに終演し、懇親会では森岡君の名字に関係する著書のプレゼントもありました。

関東支部同窓会準備会

島本陽子（75回）

1年前の懇親会の壇上で旗を受け継いだそのとき、責任感と高揚感を感じたことを今でも覚えています。

10年前の私は幹事の回ではあったものの、同級生からの声かけに応じ当日出席するだけで、もてなされる側におりました。

今回初めて幹事として同窓会に臨むことになり、毎年当たり前のように開催されているこの会が、実際はたくさんの方々の時間と知恵と協力があってできあがっているものだということを強く実感致しました。

今年は45回生の方々か主となって、準備会を仕切って下さいました。また、前任の回先輩方も準備会に出席して下さい、色々とアドバイスして下さいました。幹事経験のない私にとって、経験者の先輩方がたくさんいて下さったことは本当に心強く、頼もしいことでした。

前任の回先輩方からのアドバイスにより、早めに準備をスター

トさせようということで、11月には幹事の顔合わせをし、全体ミーティング10回、役割担当ごとのミーティング等も各々で行っていましたので、延べにするとかなりの回数であったと思います。

全体ミーティング後の飲みはお約束のようなもので、さすが土佐っ子というか、お酒が好きな方が多く、お酒代で高くついてしまうという高知あるあるみたいなことも多々ありましたが、楽しい思い出の一つです。世代を越え、ざっくばらんに話ができて、こういった縦のつながりができるのは準備会の良いところ、土佐校の良いところであり、特に今回の準備会の役割分担で私の回である75回生と85回生はタッグを組むことが多く、一緒に飲みながら役割ミーティングをしたりしたことで、今まで交流がなかったことが嘘のように仲良くなれたことは、とてもうれしく感じております。

今回の関東支部総会で特に力を入れた案内状のコンセプトは「内

容盛りだくさんでより興味がわくもの」ということで、早くから準備を始め、幾度ものミーティングと飲みを重ね、みんなで案を出し合うことで納得する内容が確定できたことはもちろんのこと、それをすばらしい形で表現してくれたデザイン担当の谷脇奈蔵さん（75回）と中平彩夏さん（85回）の力はとても大きかったです。また、役割分担を決め、それぞれが責任を持ってやってきたことで、大きなトラブルもなく、スムーズに準備ができ、無事に当日を迎えることができました。それが、今回の最多参加人数達成という功を奏したのだと思います。目に見える成果があるとやったかいがあり、うれしいものですね。これからこの準備会のやりがいと楽しさが引き継がれていくことを願います。

最後になりますが、準備会に携わって下さった皆様、同窓会にご出席頂いた皆様に厚くお礼を申し上げます。



上左：ビールに校章ラベル貼り
上右：中央が筆者の島本さん



学生・若手社会人交流会

岡村康平 (84回)

2014

「高知家」というプロモーション活動が展開されていることは以前から知っていた。テレビをあまり見ない私だが、その存在をそれでも知っていたのは、大学時代住んでいた寮に「高知家」ポスターが掲載されていたからだ。上京してから7年が経ち、いつの間にか高知の記憶を失いかけていた私にとって、このフリーズとの出会いは自分のアイデンティティを再認識する良い契機となった。

昨年12月20日、恒例の「学生・若手社会人交流会」が東京大学駒場キャンパスにて開催された。毎年、社会でご活躍されている土佐高校出身の先輩方を講師としてお招きしており、貴重なお話を伺う素晴らしい機会となっている。今回は「高知家」企画を実行されている52回生の安田雅彦さんにお越し頂き、「2020外国人にも誇りたい高知の魅力」というタイトルで、我々の故郷に関してご講演頂いた。

「高知」の再勉強

山下達郎のファンクラブを結成したことがきっかけで広告の

道へと進まれた安田さんは、大学卒業後、株式会社電通へ入社された。現在は様々な企業の広告制作に携わる一方で、昔からの目標であった「高知のことを全国に広めたい」という思いを実現すべく、高知県全体を家族と見立て、高知の良さを全国にアピールしていく「高知家」企画を精力的に推進されている。高知のことを誰よりも愛する安田さんを講師にお迎えした本講演では、「高知県の再勉強」というコンセプトのもと、ダイビングの穴場である「柏島」やサーフィンで有名な「生見海岸」、「皿鉢料理」「よさこい祭り」の由来、「鯛ぜんざい」「カツオたたきバーガー」といった地元料理の紹介、更には参加者が一升瓶を一気に飲み干す「どろめ祭り」やアーケード全てを居酒屋に見立てた大規模宴会「大おきゃく」など、高知に関する見どころを存分にご紹介頂いた。

高知の宴会「おきゃく」

講演会の後には懇親会が開催されたが、ここでは安田さんが自ら実演する形で高知の宴会「おきゃく」に関してご講義頂

いた。乾杯と返杯、よさこい囃子踊りの歌まではおなじみだが、私を含めた若手世代でそれ以外の内容を把握している人は少ないのではないだろうか。全員参加型で盃をあけていく「菊の花」や、回した独楽（こま）の先端にいる人がお面の形をした杯でお酒を飲み干す「べろべろの神様」、お箸を使って数を当てあう「はし拳」など、高知ならではの座敷遊びを実演して頂き、会場は大盛況だった。

「高知を救うがは、 外の世界を知っちゃう 脱藩組やき。」

故郷に対する帰属意識、そして郷土愛が完全に復活した私の現在の目標は、高知県の良さを他の方々に知ってもらい、実際に訪れてもらうことである。今回の交流会に参加した私たちは、「高知の再勉強」で様々な知識を身につけ、「おきゃく」実演により伝統的な座敷遊びも把握した。そんな我々「土佐の脱藩組」が積極的に周囲に働きかけることで、「高知家の家族」を一人でも増やしていくことが出来れば、と思う。



「高知家」の家族が集まれば
おきゃくのはじまり。

ふるさと救援は「世代の習合」から

須賀仁嗣（五二回）

その場がしばし、静まり返った。じっと中空を見やる〇さん。□さんは腕組みしたまま肩間にしわを寄せている。女性の△△さんなど涙目になっているではないか。ちょっとクスリが効きすぎたか…。

ことし一月半ば、高知県東京事務所内の会議室でのこと。関東高知県人会の定例幹事会でテーブルスピーチに臨んだ私は、地元残留組の一員（高知新聞社勤務）として高知県の厳しい現状と容易ならざる未来について説明した。「たぶん皆さんが思っている以上に、ふるさとの状況はヤバイんですよ」。

別表は、その際に用いた資料の抜粋だ。見ての通り、ネガティブな指標ばかりをあえて拾い出している。

いま、高知県の推計人口は七三万二八〇〇人余（五月現在）。十年前に八十万台を割り込んで以降も、年平均で七千人弱が減り続けている。二〇四〇年には五十万人台まで落ち込むとの予測もある。

たとえ五十万人だろうが、人口ピラミッドが正三角形に近ければそれ

ほど案ずるには及ばない。しかし、それが絶望的だから頭を抱える。

〈このままなら全国の自治体の半数ほどが消滅する可能性がある〉

そうやって警告を発した日本創成会議の「増田レポート」によれば、高知県内三四市町村のうち二三市町村が消えてなくなる。少子高齢化の全国トップランナーは、一口にいえば地域消滅への階段を真っ先に駆け下りている状況なのだ。

これにスピーチでは、無縁社会の深まりを映し出す孤独死や手漕ぎ和紙などの各種技術・技能の継承困難、税の滞納といったモラルハザードなどの実例も交えたが、とりわけ強調したのは生活保護世帯の増大に象徴される貧困層の拡大だ。

私は昨年夏に三度目の東京勤務となった。その都度、感じてしまう。地元の情報発信力の問題もあって、県人の誇りとするふるさとの窮乏ぶりが、こちらに伝わりきっていない。そこが何とももどかしい…。



ことし年初の筆山会新年会に顔を出した。酔った勢いで「ふるさと危うし」と口走ったたら今回の執筆と相成ったわけだが、依頼文には「同窓会関係人に向けて、危機的状況と明るい報告をしていただき、また脱藩組がふるさとのために出来ることなどを紹介して…」とある。

二つ返事で受けてはみたものの、さて困った。

危機的状況。このネタならいくらでもある。明るい報告。これも、決してないわけではない。

尾崎正直知事（六一回）がタクトを振る高知県庁は、「まずは食いぶちから」と産業振興を軸に据え、移住促進や外貨獲得のための観光力アップにも注力している。その流れで私と同じ五二回生の電通マン・安田雅彦君たちによる渾身の「高知家キャ

数字で見る高知県の現状：直近の統計から

老年人口割合	32.2%	2位（65歳以上）
生産年齢人口割合	56.2%	46位（15～64歳）
年少人口割合	11.7%	45位（14歳以下）
人口自然減	-0.69%	2位
人口社会減	-0.27%	8位
高齢者のみの世帯割合	26%	3位（全世帯数は31万1千）
県民所得	219万9千円	全国平均の75%
給与総額	28万3千円	26位（*）
有効求人倍率	0.82	41位（全国1.15）
最低賃金	677円	全国最低（全国平均780円）
生活保護率	27.41%	3位（1000人当たり）
離婚率	1.87%	14位（1000人当たり）
少年非行率	34.3%	2位（1000人当たり）
就学援助率	24.3%	3位

（*）常用労働者の月額、全国平均の約90%、トップは東京都の40万5千円

ンペーン」が展開されているのはご存じだろう。

朗報としては、高知大学に今春創設された全国初の「地域協働学部」も特記しておきたい。

〈地域社会が抱えている諸課題を調和的に解決し、地域社会の再生と持続的な発展を図る〉。渡りに船のような趣意でこの学部は生まれてい

る。一期生六七人のうち約七割は県外出身者。卒業後にどれほど高知に根を張ってくれるかはともかく、彼らは紛れもなく高知ファンとなり、いざという時には頼もしい支援者となってくれるはずだ。

さて問題は、「脱藩組がふるさとのために出来ること」。ここから先は筆がおいそれと進まない。

いま、国は「地方創生」の旗を振る。しかし「知恵のないところ」にはカネを投じない、ここがかつての「ふるさと創生」とは違う。「集中と選択」をキーワードにする「増田レポート」と連動して弱小地域の切り捨てを煽る気配がありがた。

これにはおよそ同調するわけにはいかないが、提唱されている「ふるさと投資の推進」は、資金難で埋もれている起業家や伸ばすべき事業プランなどをクラウドファンディングで後押しする狙いだ。「ふるさと納税」と同様、「脱藩組」が使えるツールかもしれない。

ただ、カネもさることながら、ふるさとがより希求しているのはヒト（人材）そのもの。ここをどうすればいいのか…。

〈第二の人生はふるさとで〉と考える向きには、それぞれのキャリアア

を生かせられるUターンの道筋をある手この手できり上げる。そんな環境整備が急がれる。いまの高知には、とりわけ地域経営のノウハウに長けた人材が少なく。自治体の首長や議員だって、手を挙げる者がいなくなっている。

もっとも、ここで乗り越えるべきハードルが一つ。オンチャンたちが帰郷の一念を起こしても、「だったらあなた独りで帰れば」。奥方にすげなく突き放されるパターンが多さだ。こうなると、実効性のあるオバチャン吸引・定住策を打ち立てる方が先決だ。

「いいか、よく聞け。金を残して死ぬ者は下だ。仕事を残して死ぬ者は中だ。人を残して死ぬ者は上だ。よく覚えておけ」

後藤新平はこう言い残して世を去った。明治から昭和初期にかけて多方向に手腕を振るった傑物は、有為の人材をつくりだすことが人として最上の仕事だと説いている。

らしい掲げているのではない。若い人にも目を向けてみる。若い世代は、その時代に見合った価値観を備える。そこに前世代までが持ち得た価値観や知恵をつなぎ合わせ、調和させて収める。この作業は「世代の習合」とでも言えはいいか。価値観が利他的で永続性に乏しいと、無駄な公共投資や浮薄な使い捨て文化を生みだしてしまう。そして、これが最も憂うべきことだが、不戦と専守防衛の誓いさえゆるがせしてしまう。

窓人の間で、と願う。そこから「ふるさと再生」の方途も見えてくる気がする。



大学院で、雇用と地域を学び始めました

高知を先進的雇用の

バイオニア県にしたい

七回 勝田千砂

『筆山』の編集委員となつて四年目に突入しました。年に二回の編集作業で先輩や後輩など、同窓生の活躍にふれ、刺激を受けています。また、編集委員を機に同級生との交流も再燃し、関東はもちろん、地元に戻れば高知で働く七二回生たちとも語り合う機会が増えました。

いつしか私も高知に戻れたら、と考えるようになり

ましたが、雇用の壁にぶつかりました。これは、Uターンを阻害する要因の一つだと考えます。そして、高知を含む多くの地域が抱える共通の問題でもあります。培ってきた専門性を県内に持ち帰って活かしたい、と思っている方は多いのではないのでしょうか。しかしそのためには、既存の仕事やこれまでどおりの働き方だけでは対応しきれません。

ただ、雇用の壁にぶつかりました。これは、Uターンを阻害する要因の一つだと考えます。そして、高知を含む多くの地域が抱える共通の問題でもあります。培ってきた専門性を県内に持ち帰って活かしたい、と思っている方は多いのではないのでしょうか。しかしそのためには、既存の仕事やこれまでどおりの働き方だけでは対応しきれません。

先I期が終了しました。必修科目の「政策ワークショップ」では、雇用・観光・CSR・地域経済など、各ゼミの教授の専門分野に「協働」の視点を掛け合わせて、毎週、チームで地域活性化につな

先I期が終了しました。必修科目の「政策ワークショップ」では、雇用・観光・CSR・地域経済など、各ゼミの教授の専門分野に「協働」の視点を掛け合わせて、毎週、チームで地域活性化につな

つながらる政策を模索しました。日本では「協働」による地域活性の成功例がまだ少ないのが現状です。しかし、土佐OB・OGの知力と経験と高知愛を集結すれば、高知をもっと盛り上げていくのでは…と妄想しつつ、自分の研究を高知の特色に合った政策に結び付けられるよう、事例研究や考察を進めています。今後の研究において調査等が必要なのは、ご協力を賜えますと幸いです。

「高知家」の家族が笑顔になれる活動につなげたい。二年間（予定）の研究生活は、始まったばかりです。



学校長 山本 芳夫 (40回生)

土佐中学・高等学校 事務局 千頭裕 〒780-8014 高知市塩屋崎町1-1-10
(TEL) 088-833-4394 (FAX) 088-833-7373 (E-mail) tosa@tosa.ed.jp (HP) <http://www.tosa.ed.jp/index.html>
土佐中学・高等学校同窓会本部 会計幹事 千頭裕 〒780-8014 高知市塩屋崎町1-1-10
(TEL) 088-833-4394 (FAX) 088-833-7373 (E-mail) tosa@tosa.ed.jp (HP) <http://www.tosaobog.com/>
北海道支部 事務局長 山本隆昭 〒001-0018 札幌市北区北18条西6丁目 ARTE 88-305
(TEL) 011-756-2817 (FAX) 011-756-2817 (E-mail) yamat@den.hokudai.ac.jp
東海支部 事務局長 瀬沼憲司 〒455-0064 名古屋港区本宮町6-7-5 フォレスト本宮201
(E-mail) knzss@kza.biglobe.ne.jp (HP) <http://tosakotokai.web.infoseek.co.jp/>
関西支部 事務局長 藤原由親 〒530-0003 大阪市北区堂島2-1-27 桜橋千代田ビル 4F
税理士法人WEST BRAIN 気付 (TEL) 080-9166-2400 (FAX) 06-6110-5419
(E-mail) yoshichika-fujiwara@westbrain.jp (HP) <http://www.tosa-ko.org/kansai/>
広島支部 事務局長 大谷準一 〒734-0007 広島市南区皆実町6-3-26-902 (TEL) 082-253-5759
(FAX) 082-254-7523 (E-mail) spat5629@vesta.ocn.ne.jp (HP) <http://www.geocities.jp/hiroshimashibu/>
香川支部 事務局長 野村喜久 (担当: 福原俊介) 〒760-8573 高松市丸の内2番5号 四国電力(株)
(TEL) 090-7780-3722 (FAX) ナシ (E-mail) fukuhara14443@yonden.co.jp
関東支部 事務局長 二宮潔 〒100-8222 千代田区丸の内2-6-1丸の内パークビルディング
森・濱田松本法律事務所 弁護士市川直介 気付
(TEL) 03-5223-7719 (FAX) 03-5223-7619 (E-mail) naosuke.ichikawa@mhmjapan.com
(HP) <http://www.tosako-ko.org/>

支部便り ～各地のおすすめスポット～

北海道支部 山本隆昭 (53回)

花巡りで広さ体感。

1. 静内二十間道路、直線七kmの桜並木。全部同時の満開は数年に一度。
2. 浦河西舎桜並木、全長三km。
3. 平取芽生スズラン群生地、広さ十五畝。
4. 遠軽太陽の丘えんがる公園、十畝に千万本のコスモス。
5. 名寄智恵文ひまわり畑、十畝に六十万本。

花期などはHPなどでご確認ください。



広島支部 沖田道子 (41回)

「忘れてはならない夏がある 昭和20年8月6日」。今年は被爆七十年。「絵で読む 広島原爆」西村繁男絵を片手にご家族で広島平和資料館を訪ねての平和学習はいかがでしょう？ 広島支部では、11月7日、新同窓会名簿の表紙を担当された、絵本作家の西村繁男さん40回をお迎えして総会が開かれます。

香川支部 岡林龍範 (70回)

うどん県それだけじゃない香川県。されど「うどん」は香川の代名詞、ということでご紹介いたします。香川県坂出市にある日本一営業時間の短いうどん屋さん、その名も「日の出製麺所」。営業時間は午前11時30分～1時間、開店の1時間以上前から行列ができることも。香川にお越しの際はぜひ一度ご賞味ください。

本部 土佐中・高等学校同窓会副会長 高木直之 (57回)

高知家・まるごと東部博が開幕！「高知県東部の人のおもてなしとジオの恵みにであう旅」がコンセプト。高知県東部9市町村を三つのエリアに分けて、室戸世界ジオパークセンター、北川村モネの庭マルモッタン、安芸市立歴史民族資料館などの施設を拠点とし、観光やイベント、体験、交流を楽しむ博覧会。今年は東部が熱い！

関東支部 浜崎円 (72回)

「オクジブ」という言葉をご存知でしょうか？ 渋谷駅から東急本店に向かって裏手の松涛と、右手の神山エリアが、最近こう呼ばれています。個人店ならではの気持ちの良いサービスと、手頃で美味しいお料理、そして渋谷とは思えない、静かであったりとした時間がそこには流れています。ネットで探せるのは便利ですが、自分の足でお気に入りを見つけてみてはいかがでしょうか。

東海支部 瀬沼憲司 (64回)

東海支部では、5月16日(土)に再開発真っ盛りで高層ビルが建設ラッシュの名古屋駅にて総会をとりおこないました。新幹事長に49回楠正隆さん(今本四月より名古屋大学教授)が選任され、会計には、58回川上正衛さんが選出されました。若返った役員にて頑張りますのでよろしくお願いいたします。

関西支部 原田和人 (56回)

関西での新名所は、やはりキタは「グランフロント大阪」、ミナミは「あべのハルカス」でしょう。周辺商業施設も充実してきました。特に「あべのハルカス」が建つ天王寺の象徴は、元々は通天閣。ジャンジャン横丁で串カツを堪能して、レトロな通天閣とファッショナブルなハルカスを昇り比べるのも面白いかもしれませんね。



展望台ハルカス300の
公式キャラクター
あべのべあ

本 部 便 り

●名簿は同窓会の命です

会員名簿が、会員相互の交流、同窓会活動活性化の一助となると同時に、母校の一層の発展に繋がることを願っています。

関東支部の皆さん、日頃は同窓会本部に格別のご支援ご協力をいただき、ありがとうございます。本部長は最近、年に一度のホームカミングデー、回生の周年記念同窓会だけでなく、六十回生から八十回生代の若い世代が中心となり、色々な会を活発に企画運営していただいています。関東支部のみなさんの活動が刺激になっているようです。

●表紙は絵本作家の

西村繁男氏(四十回)

『にちよういち』や、土佐校の木造校舎を描いた『向陽曼陀羅』でおなじみの絵本作家、西村繁男さんに名簿の表紙をお願いしました。

●二〇一五会員名簿調査が

始まりました

さて、すでに皆さんのお手元には名簿調査はがきが届いていることと思います。まだ返信されていない方は、変更があるなにかかわらず、ポストに投函、もしくは、同窓会HPの二〇一五会員名簿変更バナーや携帯から返信をお願いします。お知らせの同窓生で、この調査はがきが届いていない方がいましたらHPのバナーから登録をお願いします。

後日詳細な申込用紙をお送りします。

●名簿作成業務の委託

役員会で検討を重ねた結果、今回初めて、個人情報・安全性・正確性で有数の実績を持つ小野高速印刷(株)のご協力をいただくことに致しました。何卒ご理解ご協力をお願いします。

■二〇一五ホームカミングデーは八月十五日(土)

七月上旬に皆さんのお手元にプログラムが届きますので、お楽しみに！

副会長(二〇一五名簿委員長)

横田 整一(四十回)

関 東 支 部 便 り

■六月六日(土) 霞が関ビルにて、新卒の九十回生をご招待して、末尾五の回生有志の方々と幹事に、総会・懇親会が盛大に開催されました。

支部報告や会計報告の後、山本校長先生からは、一月三二日に行われた高校の卒業式での、卒業生代表の川村さん(現在、

高知大学医学部二年生)の答辞を映像でご紹介いただきました。先輩の言葉に胸を熱くし、土佐高で受けた教育への感謝を再認識しました。

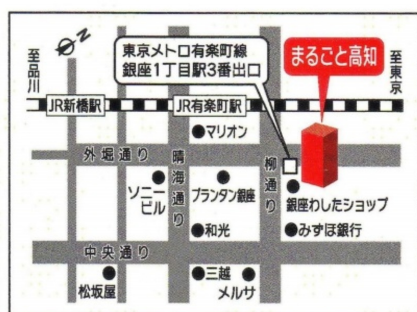
■基調講演は、森岡浩さん(五五回)による「名字とルーツ」。高知県特有の名字(西森・中平・岡林)を含む、高知県名字ベスト五十の発表もありました。

■懇親会は、特別ゲストの土居徹先生・酒井

満先生をお迎えし、三六〇名超という記録的参加者数でした。最後は全員での集合写真を撮影、同窓生がひとつになった瞬間を味わいました。

■お知らせ

はちきん会は、十月三日(土)受付十時半から。場所は、カナダ大使館地階の「ボウ デパール 青山倶楽部」と決定しております。皆様、ふるってご参加ください。(詳細は、同封パンフレットをご覧ください)



www.marugotokochi.com/
Tel 03-3538-4351 (サンゴ・血林・ヨサコイ)
〒104-0061 東京都中央区銀座1-3-13

おきやく
TOSA DINING

一般財団法人
高知県地産外資公社
プロデューサー
濱田知佐(56回)
アルバイト
西村希生(83回)
山崎沙央里(83回)
和泉侑吾(87回)
泰原 健(87回)
下田 優(87回)
高木菜水(88回)
清岡玲布(88回)
渡邊真子(88回)
高田裕斗(89回)
竹内 駿(90回)



会長の森健さんによる
新年会開会のごあいさつ

◆**新年気分を満喫**
昨年より幹事を務める前田憲一さん(三七回)の薫風爽快たる司会で新年会が開催された。

◆**森健(二三回)会長挨拶**
「皆さんおめでとうございます。筆山会は、同窓生の連携を密にした交流の場としてお互いに精神的にもサポートし合う使命がある。戦後は終わった。個人として世界に信頼される国となるように日本を盛り上げたい。そのためにも元気で楽しくジャンプの年をスタートしよう。」格調高いご挨拶に一同大いに頷いた。

筆山会 幸徳正夫(三七回)

新年会 平成二五年一月十日
明治神宮を前に臨む代々木倶楽部にて
参加者 男性五六名 女性十三名



防衛大臣・中谷元さんを囲んで

◆**特筆すべきは**
防衛大臣の重責を負う中谷元さん(五一回)が、公務多忙の中、奥様同伴で参加。「おおっ元ちゃん久しぶり！」

関東支部支部長の森郁夫さん(四一回)。経済界の重鎮らしく消費増税の一年先送りと、自民党の圧勝に触れた。参加者多数の三七回・三八回に圧倒される！とのご挨拶と乾杯の発声で一気に盛り上がる。しかし、乾杯前から既に盛り上がりつつある面々も、土佐らしい光景なり。

ぶり！あいついかん大臣に元ちゃんはいかなあ。」の声に、「どうか元ちゃんでお願ひします。政治生活も二五年。思わぬ形で防衛大臣を拝命。『人生常に有事即応』と心得える。今が我が国の正念場だ。」と、篤く簡潔に語った。



巨人軍の全力疾走を
紹介する浅井伴泰さん

◆**土佐高バリ全力疾走**
自由スピーチの時間。同郷婚を意識する人が増え、高知への回帰願望も生まれるのではと語る・織田祐輔さん(四五回)。

幸徳秋水を文筆家として一目置いていると話す・西内一さん(三十回)。三七回の黒川友爾さんと武政茂明さん(四五回)。

◆**好々爺的な雰囲気**
懇親会司会の中島宏さん(三八回)の紹介で関東支部幹事長市川直介さん(五三回)が学年幹事の見直しについて報告。



笑顔で校歌を歌う
吉本恵子さん

んは、仏像彫刻の制作談話。浅井伴泰さん(三十回)は、巨人軍が土佐高の全力疾走を見習うとのスポーツ新聞を紹介。会場は拍手喝采。「グルコサミンを飲んで次回お会いするのを楽しみに。お・わ・り・ま・す。」なんとも味わい深い。

◆**フリーフリー 土佐校**
高田谷洋さん(三八回)の音頭に吉本恵子さん(三七回)の清楚な歌声が会場に響きわたり、参加者の校歌斉唱で今年の筆山会もお開きとなる。

六月の総会を前に、森健さんから浅井伴泰さんへ会長をバトンタッチ。先輩方が築かれた歴史を受け継ぎ、一層の輝きを増すように心がけたい。来年の新年会がもう待ち遠しいのである。



華やかな女性陣



また来年、
筆山会新年会でお会いしましょう！

お遍路

濱田知佐 (五六回)

高野山開創二〇〇年という記念の年を目指して、昨年の春に三泊四日、秋に三泊四日、今年の春に四泊五日と、一年かけて八十八ヶ所お遍路の旅を結願し、さらに高野山にまでお参りにいくことができました。

メンバーは十佐高卒業生五名(三七回馬田さん、四一回森さん、四七回黄川さん、五六回西森さん、私)を含む総勢二十名。お世話になっている高野寺のご住職にご引率いただき、もう何土回と回ってらっしゃり歩き遍路もご経験のある経験豊富なお寺の檀家の皆様、お声を掛けさせていただいた高知在住の同級生や東京在住の友人や先輩方、そして母。

年齢は八五歳から三四歳まで、仕事も経験も違います。ベテランの方々のご迷惑にならないようにと、出発に先立ち、東京組の八名は恵比寿のカフェに集まり、お遍路についてのミニレクチャーを実施。お遍路でのマナー、参拝方法、お経の読み方、準備するものについてなど、説明させていただきました。

そして、出発の前日に、高知組東京組のお遍路初めての十名ではりまや橋で待ち合わせをし、そのまま八屋さんにいき、白装束、杖、杖力バ、お



経、お数珠、ロウソク、線香、納経帳、帽子などを二式揃え、翌朝六時には一番札所の霊山寺がある徳島県に向けてバスで出発しました。

徳島県は発心の場、高知県は修行の場、愛媛県は菩薩の場、香川県は涅槃の場と言われて人生にも例えられている。

幅広い年齢層の二十人が素晴らしいチームワークのもと皆で助け合い、宿泊はお遍路宿やお寺の宿坊やホテルなど様々で、だいたい三〜四人が一部屋のことが多く、食事の後どこかの部屋に集まり二次会を開催し、まるで大人の修学旅行のようでした。

私にとっては一回目のお遍路で、まさかもう一度元氣にお遍路ができると思っていなかったもので、とても榮しくありがたい経験でした。

そもそも初めて「お遍路に行かんかね」と母に誘われたのは、二〇〇六年の秋のこと。



る石段を登りお参りをする。約二〇〇年も前にこのような山の上にお寺をひらくとはどのような苦労があったのだろう、きつい階段を登って身体を動かせることはなんと幸せなことか、澄み切った空気が漂う自然の中はなんと清々しいことかと様々な思いを巡らせた。

丁度その二年前に大病を経験し、九か月の治療が終わり、約一年が経ち、髪の毛も生えそろう、体力が回復し始めた頃でした。自分の手術の四日前に父危篤の報告を受け、高知行き飛行機に飛び乗りましたが、ボンバルディア機の滑走路離脱事故により高知空港閉鎖。上座で四十分間旋回している間に父が逝き、死に目に会えなかったことも心の中で大ききひっかかったままでした。

父がああ世でいいところに行きますように、迷惑をかけた家族が健康で幸せでありますように、自分の病気が治りまた役に立つ仕事ができるようにと、たっさんのお願い事を抱えて、初めてのお遍路に行くことになりました。

その時のメンバーは、ご住職母を含むお寺の檀家の皆様、総勢九名で最高齢は八十歳台、私が一番の若手でした。もちろん歩き遍路ではなく、ジャンボタクシーに乗ってお寺の近くに止まり、何段もあ

る石段を登りお参りをする。約二〇〇年も前にこのような山の上にお寺をひらくとはどのような苦労があったのだろう、きつい階段を登って身体を動かせることはなんと幸せなことか、澄み切った空気が漂う自然の中はなんと清々しいことかと様々な思いを巡らせた。

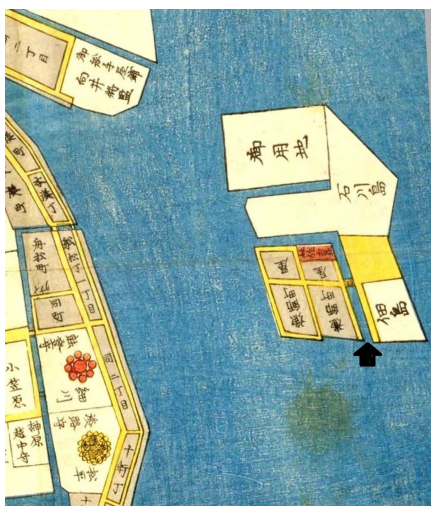


世界で唯一の循環型の巡礼地である四国八十八ヶ所を巡る終ると、自然にもう一度行きたいという気持ちになると言われています。私も同様に、「開創二〇〇年の年にもう一度行きたいね」と母と話していました。リンパ節に五十個も転移があった私が二〇一五年まで生きていられるかわかりませんが、もし行けるならきっと東京に住んでいる高知県出身の方々で行きたい人は多いはずだから自分が味わった清々しい気持ちや自分と向き合う時間などを経験していただき

たいと思ったのです。お遍路や高知滞在を通じて高知の食や自然の深さも実感し、「自分は若くして病気になるだけ、この先少し元気を無くした人が帰ってこられる場所をつくりたいなあ」と思い始めた時に、高知県アンテナショップのお仕事をいただいたのです。お遍路は、私にとって故郷を思う気持ちを大きく膨らませてくれたとても貴重な経験で、お願いの通りに立つ仕事ができなかったかもしれませんが、「艱難、汝を玉となす」という言葉を胸に、さらに精進していきたいと思っております！



江戸百景 (七) 佃島と隅田川白魚漁



(上)江戸切絵図<尾張屋清七版(嘉永頃-1850頃)>より、隅田川河口の佃島。当時は佃島と石川島だけで、月島地区はない。現在の佃島・月島地区の三十分の一以下の面積である。



(上)歌川広重「名所江戸百景」より「永代橋 佃し満」(安政三年-1856)。永代橋の橋脚に半分隠れて白魚漁の四手網と篝火を描き、前方に船をもやった佃島を描いている。



(上)現在の永代橋の下から、上図と同じ構図で昼間に撮影。右に見えるのが佃島地区。左方は埋め立て地で広重の時代より陸地が大幅に増えている。

「江戸っ子」という言葉は比較的新しく、安政二年(一八五五)の大地震のあとの復興景気で職人たちの懐具合が良くなり、宵越しの銭は持たねえとばかり女郎買いに走り、昼間は芝居見物にうつづをぬかす、このように職人たちの景気が良かった幕末に、職人連中が自分たちを「江戸っ子」と呼んだのが始まりである。従って、武士はもろん上級町人達も、自分たちを江戸っ子と呼ぶことは、その後もなかった。その江戸っ子たちが女房を質に入れても口にしたり、がったのが初鰹であるが、初鰹が珍重される以前に江戸っ子が隅田川河口で行う白魚漁は、幕命により、佃島漁民の専売特許であった。

全戸佃島の由来
天正年間(一五九〇頃)、徳川家康が江戸入城に際し、遠州浜松の居城から摂津多田の廟所(摂津源氏)および住吉大神に参詣した時、神崎川に渡船がななく困っていると、摂津西成郡佃村の漁民が漁船をもって家康の一行を渡したので、爾来、家康は伏見在城の時も鮮魚供進の命を蒙る。その後、佃村の名主森孫右衛門が村内の漁民三十四名を率いて江戸に召され、江戸湾で漁を行い、江戸城の魚御用を勤めるようになった。慶長十八年(一六一三)八月十日、日本中の海川漁権の免許を与えられた。大阪両度の陣にも佃村漁民は漁猟及び密使の役をうけた。寛永年間(一六三〇頃)、鉄

砲洲の東の干潟、百間四方の地を賜り、正保元年(一六四四)二月漁家を建て並べて、本国佃村の名をとって、佃島と名づけた。佃島の住吉神社は、本国摂津の住吉大社を勧請したものである。これより幕命により毎年十一月から三月まで白魚を取って幕府に差し出すこととなった。

〈白魚漁〉
江戸には元々白魚はおらず、隅田川をはじめ両国の川筋に産する所の白魚は、尾州名古屋の浦より取り寄せたものだとい(一説に摂津佃村からはるばる取り寄せたともいう)。白魚は二月の末から隅田川をのぼり、三月頃子を産み、その子が秋の末になると河口へおりてくるところを、佃島漁民の数の多い漁舟が篝火をともしつらね、四手網を拡げて一月から三月まで、毎年十の美観として江戸人に賞され、浮世絵等の絵画に描き残されている。白魚は江戸人が特に好んで食べた高級魚であった。のちに白魚は次第に衰微し、鰹に取って代わられるのだが、白魚漁は明治時代まで続いた。江戸時代の白魚の料理法は現在と同じようなものだらけ物、佃煮等があったらしいが、江戸人が最も好んだものは、新鮮な白魚を二杯酢で食することだったであろう。その次に、白魚の吸い物を好んだと思われる。江戸人がこの白魚漁の景と白魚の味にどれほどこだわったか。四手網を寄せてる 其角

(四一回 西岡恒憲)

「月も朧に白魚の篝も霞む春の空・・・」歌舞伎「三人吉左廓初買」お嬢吉左の冒頭のセリフ(黙阿弥作)
白魚やはばかりながら
江戸の水 竹冷



(上)切絵図の矢印の地点から撮影した現在の佃島。掘割と橋の場所は江戸期のままである。

ガーナよさこいの夏です

「ガーナよさこい支援会」より



表参道を行進する「ロッテ・ガーナよさこい連」先頭

夏の風物詩となったガーナよさこい交流。今年も、日本研修旅行に参加のガーナ高校生約20名が八月二一日に来日、麻布学園など都内高校生や東京遠征の土佐中高生らと合流して、八月三〇日(日)午後「原宿スーパースタディオ」に出場します。国際学生チーム「ロッテ・ガーナよさこい連」が表参道行進のトップスパートを切るのは二回目。猛練習を乗り越えた生徒たちがどんな踊りを見せてくれるかどうぞ期待です。毎年ボランティアを続けてきますと、忘れ得ぬ生徒たちの顔が次々と浮かびます。

何年前だったか東京での高校生交流の初日、体育館で行ったオリエンテーション(自己紹介やゲームをして雰囲気慣れる)の場で、高知から上京して参加したA君の心細げな様子が気になりました。引率の先生によれば、「彼が上京したいと申し出たので驚き、親御さんに真偽を確かめた」くらい引つ込み思案だとのこと。遊び戯れる生徒たちから離れて独りぼっちの彼に、ガーナの女生徒二、三人が寄ってきて何やら話しかけていました。二日三日たつと、仲間の輪の中にいる彼の姿がみられるようになり、交流最終日のスーパースタディオを晴れ晴れとした顔で踊りきりました。翌年も参加したA君は郷里で英語弁論大会に応募して上位入賞を果たし周りを驚かせたそうです。

極度に繊細で、ガーナ人に抱きつかれたと訴えてメソメソ泣いていたB子がすっかり逞しくなり、難関私大に進んで米国留学に旅立ちました。また、奇矯な行動が目立った「クラスの問題児」C君は、交流の翌年「ボクも少しは大人になりました」と胸を張り、今春国立大学に進学しました。彼らは、(時間にルーズなど短所はあっても)仲間と助け合い分かち

合う限りの優しいさを持ち、真剣に夢や志を語る新興国ガーナの若者たちと接して「変わった」のでしょうか。ただA君に限っては、ガーナ人生徒の中に部落の呪術師の弟子がいてもしや魔法をかけたのでは?と私は今も疑っています。なお、ガーナ高校生一行は東京での交流のあと九月一日から長野県飯田市に一週間滞在、更に豊田市(トヨタ工場見学)、京都(古都の見学)を経て八日帰国予定です。詳しい日程を七月中旬ごろ関東支部HPにアップしますのでご参照ください。

(三五回 公文敏雄)

掲載写真は二〇一四年夏の「ロッテ・ガーナよさこい連」です。| 沢村武彰さん (三八回) 撮影



中村さん(37回)、金澤さん・田口さん(55回)、浅井さん(35回)らの姿も

呼吸法(氣) トレーニングの集い

昨日より「今日がいちばん」ステキな日
～心身のリラックス～



土佐高OB・OGで、月に一度、呼吸法のトレーニングを実施しています。プロスポーツ選手から土佐高野球部までご指導経験のある瀧上先生のご指導の下、正しい姿勢と全身呼吸で、毎日を健康に過ごしましょう。

世代を超えたメンバー間の語らいもあり、皆終わった後は心がずっと軽くなり、背筋も伸びて、活力が湧いてきます。

東急池上線 洗足池駅徒歩1分
毎月第二日曜

13時半～16時15分定例開催。

先生への謝礼として会費

(月額五千円)あり。

詳細は今年度幹事

76回生 金澤・池田(宮村)

kienergy.tosa.kantobranh@gmail.com

までご連絡下さい。



NHKストリートでの集合写真



一般社団法人

土佐婚俱樂部®

婚活のお悩みを心を込めてサポート致します

代表理事・東京相談室長 織田祐輔 (45回生)

顧問弁護士 浦田理有 (76回生)

顧問 岩松潤二 (45回生)

URL <http://tosakonclub.com/>

東京相談室 042-521-2020

〒190-0012 東京都立川市曙町1-12-19 吉田ビル401

写真同好会

「土佐高写楽塾」

第一回撮影会の場所を、初会合にて《湯河原梅林》に決定。三月十五日朝十時に湯河原駅に集合。

前日の雨は上がり、雲は風に流されて青空がだんだんと広がってきた。花の背景には青空がよく似合う。梅林口のバス停に着くと、ほのかに梅の香を感じた。まずは、山全体を撮影。モコモコっとピンクから白のグラデーションが一面に広がる。

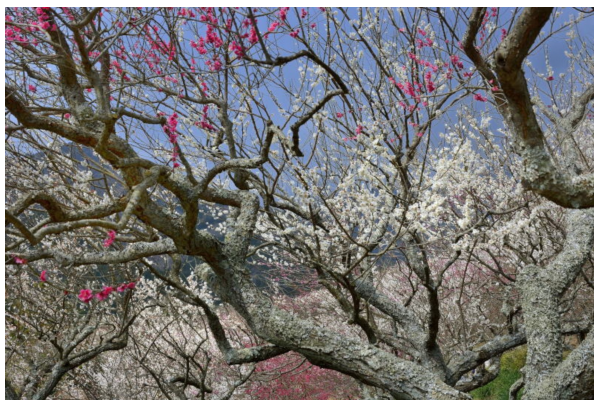
花はたくさんあれど、どの様に撮ったらいいかは難しいもの。写真家弥勒展丈さん（37回）は、『梅の枝、苔、梅の花』とテーマを決めて歩いた。出来上がった写真の構図は、梅の枝が空をつかんでいるかのよう迫力を感じる。思いどおりに写真が撮れるのが羨ましい。勉強熱心な橋田恵美子さんは、自分好みの構図の写真はどうやっ

ととるのか？と弥勒先生に指導を仰いでいる。初心者の私は、買ったばかりのカメラをまだ思うように調整できず、スマホ任せのほうが上手なのが現実。写真を撮りながらも頂上まで登るのが目的だった濱田継夫さん（37回）は、心地よい汗とともに山頂の眺めを楽しんだ。森光紀夫さん（37回）は梅を眺めながらの「梅ソフトクリーム」も逃さず食べた。

旬の時期に被写体を求めての小旅行。今回はどんな技を教えてくださいませんか？と楽しみにしている。まだまだ塾生募集中。ご一緒にしませんか。

中平公美子（59回）

参加・お問い合わせは 橋田まで
hashida.yokohama@nifty.com



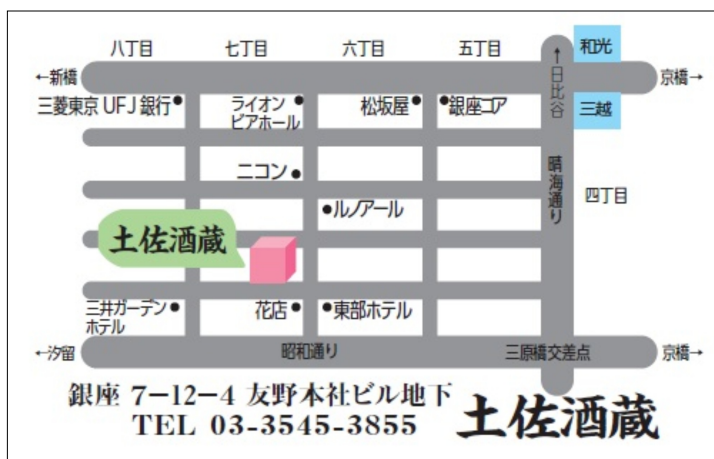
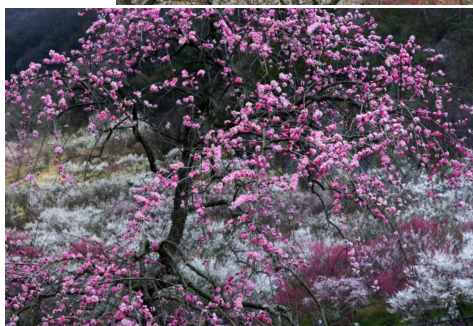
編集後記

『筆山』の編集をお手伝いし始めて三年が経ちました。念願だった発送方法の見直しがこの第五八号で実現しました。お手元に届いた『筆山』はピンと姿勢よく、カラフルになっていきます。より読みやすくお届け出来ることをうれしく思います。

毎号、新しい出会いやご紹介から執筆依頼をし、こんなに素敵な方が同窓

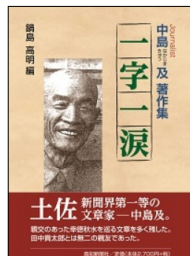
生にはいるんだなあと発見します。同好会に取材に行くと、先輩後輩の関係もなく会話し趣味を楽しむ姿を羨ましく思います。こんな同窓生を皆さんにも知っていただきたい。この思いが十六ページを作っているのです。

「私たち同窓生にはこんな企画があるんです。」「同窓生の活躍を知りたい。知ってもらいたい。」という方は、ご一緒に編集作業をしませんか。ぜひ編集員までご連絡ください。お待ちしております。N



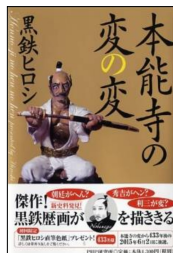
倉橋由美子 (29回生)

「たんときれいに召し上がれ
美食文学精選：花の雪散る里」
<2015.1 ¥3,132 芸術新聞社>
「最後の祝宴」
<2015.5 ¥4,104 幻戯書房>



塩田潮 (40回生)

「内閣総理大臣の日本経済」
<2015.4 ¥2,484 日本経済新聞
出版社>

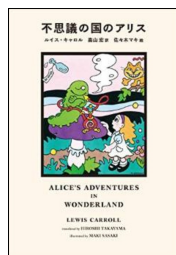


黒鉄ヒロシ (41回生)

「本能寺の変の黒鉄」
<2015.3 ¥1,404 PHP研究所>

高山宏 (42回生)

「不思議の国のアリス (ルイス・キャロル著)」
<2015.4 ¥1,728 亜紀書房>



西田博 (47回生)

「刑務官へのエール」
<2014.11 ¥1,728 廣済堂出版>

村木厚子 (49回生)

「あきらめない一働く女性に贈る愛と勇気のメッセージ (文庫)」
<2014.12 ¥788 日本経済新聞
出版社>



坂東真砂子 (51回生)

「朱鳥の陵 (文庫)」
<2015.1 ¥756 集英社>

門脇護 (53回生)

(ペンネーム 門田隆将)
「吉田昌郎と福島フィフティ」
<2015.2 ¥1,512 PHP研究所>
「太平洋戦争 最後の証言 第一部 零戦・特攻編 (文庫)」
<2015.5 ¥734 角川書店>



「太平洋戦争 最後の証言：第二部 陸軍玉砕編 (文庫)」
<2015.5 ¥778 角川書店>

「太平洋戦争 最後の証言：第三部 大和沈没編 (文庫)」
<2015.6 ¥734 角川書店>

「蒼海に消ゆ 祖国アメリカへ特攻した海軍少尉「松藤大治」の生涯 (文庫)」
<2015.6 ¥734 角川書店>

英保未来 (54回生)

(ペンネーム 大森望)
「ザップ・ガン (フィリップ・K・ディック著)」
<2015.3 ¥994 早川書房>



「vN (マデリン・アシュビー著)」

<2014.12 ¥2,052 早川書房>

「人間以前 (フィリップ・K・ディック著)」

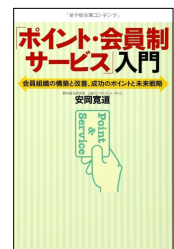
<2014.11 ¥1,166 早川書房>

森岡浩 (55回生)

「あなたの知らない九州・沖縄地方の名字の秘密」
<2014.12 ¥972 洋泉社>

「日本の名字」

<2015.3 ¥596 エイ出版社>



安岡寛道 (63回生)

「ポイント会員制サービス入門」
<2014.6 ¥1,728 東洋経済新報社>

鍋島高明 (30回生)

「一字一涙：Journalist中島及著作集」
<2015.2 ¥2,916 高知新聞総合印刷>

中城正亮 (30回生)

「江戸時代 子ども遊び大事典」
<2014.5 ¥12,960 東京堂出版>



田島征三 (34回生)

「トペラト」
<2015.3 ¥1,080 現代企画室>
「やぎのしずかのしんみりしたいちにち」
<2015.5 ¥1,404 偕成社>

尾池和夫 (34回生)

「2038年南海トラフの巨大地震」
<2015.3 ¥2,700 マニュアルハウス>



大橋一章 (36回生)

「会津八一」
<2015.1 ¥2,052 中央公論新社>